

博士論文概要・令和元年度3月/令和2年度9月修士論文概要

兼安, 章子
福岡教育大学 : 講師

岩永, 裕次
九州大学大学院人間環境学府

宮崎, 麻世
九州大学大学院人間環境学府

呉, 家瑤
九州大学大学院人間環境学府

<https://hdl.handle.net/2324/5068303>

出版情報 : 教育経営学研究紀要. 22, pp.59-78, 2021-03-26. The Laboratory of Educational Administration, Educational Law Graduate School of Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

小学校における宿題に対する教師と保護者の意識に関する研究 —フォーカス・グループ・インタビューの分析を通して—

宮崎 麻世
(令和2年3月修了)

【章構成】

- 序章 研究の目的と背景
- 第1章 宿題とは何か
- 第2章 宿題に内包される概念
- 第3章 フォーカス・グループ・インタビューの分析
- 第4章 宿題に対する教師と保護者の意識に関する考察
- 終章 研究の成果と課題

【概要】

序章 研究の目的

本研究の目的は、宿題の定義についての新たな知見を見出すとともに、教師と保護者の宿題に対する意識の調査を行うことで、現代の学校教育と家庭教育の関係を宿題の視点から検討を行うことである。

宿題が行われている実態として、ベネッセの学習指導基本調査によると2016年において小学校の教員が宿題を出す頻度は“毎日”が95.2%となっている。またその内容として計算や漢字などの反復的な練習が86.8%、音読が84.4%となっており、多くの教師が反復的な宿題を毎日だしている実態がある。宿題に多くの教師が取り組んでいる実態があるながらも、学習指導要領には位置づけられていないことや、学術研究の蓄積がない実態がある。また、宿題が学校と家庭を行き来する1つのツールとして位置づけ、学校教育と家庭教育の関係性を論じる。さらに宿題を教師の業務の1つとして捉え、業務の実態や宿題における成果や課題について検討を加える。

第1章 宿題とは何か

○宿題の定義と歴史的背景

現代学校教育大辞典によると、宿題は「主として知識・技能の定着を図るために教師から出され家庭でする課題を言う。」と記されている。これを書いたのは福井久満氏であるが、福井氏は小学校教諭として宿題のノウハウを著書にまとめているが、学術的な論文は存在せず、定義できているとは言い難い。

佐藤(1999)によると、現代の宿題が生まれたのは近代学校が発足した30数年後、つまり1900年代初頭であり、「国民的教養・技能」の質と量とが政策的・社会的に増大化する動向が背景となったとする。学校での授業時間では教授内容の必要最小限のすべてを確実に習得させるのはどうも困難であり、繰り返しの練習で習得されるとみなされた漢字学習や演算については家庭での練習が求められたという。佐藤は、学校での知識・技能の「教え込み」が当然とされるあいだは、宿題の課制も当然とならざるえない関係にあると述べている。

朝日新聞の記事データベース(聞蔵Ⅱビジュアル)を用いて、「宿題」と「学校」を検索語として記事検索を行うとともに、国立国会デジタル図書館のデータベースを用いて、「宿題」と「小学校」、「宿題」と「家庭学習」という検索語で、それぞれ宿題に関する論文や雑誌、本の検索を行った。

この結果をグラフ(図1)に表すと、佐藤が述べるように、1900年初頭から宿題に関する記事や文献があったことがわかるとともに、5年ごとに分布をグラフに表してみると、1955年から70年にかけて、宿題に関する記事や文献が多いことが明らかになった。

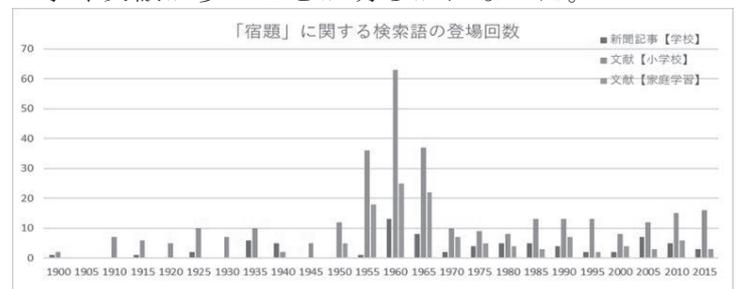


図1 「宿題」に関する検索語の登場回数

丸山(2016)は、1960年代におけるランドセル通学廃止の経緯について調査を行い、宿題における学校教育の家庭依存について検討を行った。1963年に青山学院初等部がランドセル通学廃止に踏み切ったという記事か

ら始まり、公立小学校においても実施される例が現れたという。しかし、1970年代初頭を過ぎるとランドセル通学廃止に関する新聞記事はみられなくなり、この議論は1970年代初頭には沈静化したと、丸山は述べる。

宿題は時代とともに議論され宿題の廃止が流行することもあったが、議論が沈静化していることや多くの教師が宿題を出している状況を踏まえると1900年代初頭からあまり形を変えずに存在していると言える。

○宿題から見た学校－家庭の関係

丸山（2016）は、宿題に学校教育の家庭依存が見られるという立場で調査を行い、宿題や家庭学習の縮減や廃止が学力低下をもたらすという十分な根拠がないことや学校教育が家庭教育に依存することに不平等性がある可能性を指摘している。

山村（1993）は、家庭と学校が多様なチャンネルによってつながっているとし、宿題・給食・PTAの観点から検討を行っている。家庭と学校のコミュニケーション関係を検討すると、学校からの発信の方が家庭からの発信を凌駕し、家庭が学校の指示に従う関係になっていると述べている。学校の規則が家庭生活の面にまで及ぶ場合があり、学校はあまりに家庭の独自性を軽視し、親の方針や都合を無視していることになると指摘している。しかし、それに対して親は異を唱えることをせず、むしろ教師に頼んで学校の規則として子どもを規制することを好む傾向があるという。このようにして、学校優位のもとでのあいまいな相互依存の関係がみられることになる」と述べた。

倉石（2005）は、高知や大阪で起こった解放教育について、家庭－学校の関係で宿題を視点として論じ、教育の一部を主として家庭という外部に依存（委託）せざるを得なかったこと、宿題を成り立たせている条件はこの構図の成否であること、宿題が自明のものとして根付いているのは、家庭という無償労働の調達に成功していることを明らかにし、これを「教育総動員体制」と呼んでいる。

3名の論から、宿題が学校と家庭の関係をみるときに1つの視点を提供することや宿題

において学校教育を家庭に依存や委託をしているという状況があることがわかる。本論では3名の論を基調としながら批判的に検討を加える。

○宿題に関する先行研究の整理

宿題に関する学術的な先行研究は非常に少ない。先行研究として家族負担や宿題を出す頻度、家庭階層との宿題の関わり、支援を要する子への対応、体罰との関連、児童の取り組み方などの研究が見られるが、宿題に付随するものに着目して研究を行っているものが多く、宿題の本質を捉えようとした研究は少ない。しかし、藤村・杉本（2019）らの研究により、宿題に関する論説は多く存在していることが明らかにされている。そこで本研究においては、宿題に関する論説から、宿題そのものに含まれる概念を抽出する。

○宿題の効果

国立教育政策研究所は全国学力・学習状況調査（2018）の結果から、家庭学習に関わる項目について肯定的回答をした児童生徒ほど平均正答率が高いという結果を明らかにしている。

耳塚ら（2014）は、平成25（2013）年度の全国学力・学習状況調査の結果から、家庭の経済状況等を含め、家庭・地域・学校・施策等が児童生徒の学力等とどのように関係しているのか、分析を行い、学力は児童生徒の社会経済的背景（SES）および学習時間の量によって規定され、SESが高いほど、学習時間が多いほど学力が高いこと、学力はSESに規定されつつも、学習時間の多さが高い学力の獲得に対して独立した効果を持っていること、宿題をする児童生徒ほど高い学力を得ることができること、を明らかにしている。さらに、どのような学校の取り組みが学力格差を縮小するかを分析し、教員間で「家庭学習の共通理解」をしている学校ほど、児童生徒の学力格差が小さいという結果を得ている。

また、米国においてHarris Cooperら（2006）の研究によると、多すぎない宿題は効果的であり、年齢が上がるほど宿題は効果的になること、小学生に宿題を課すのは時間管理と勉強の習慣を身につけさせる意味合いのほう

が強いことを明らかにしている。

第2章 宿題に含まれる概念

第2章では宿題に関する言説の分析を行い、宿題に含まれている概念について明らかにした。そのために、次の3つの資料を用いた。2019年3月に筆者が行った質問紙による宿題についての予備調査、1999年発行の雑誌『おそい・はやい・ひくい・たかい』に掲載されていた特集「えー、宿題!？」についての分析、1963年発行の雑誌「児童心理」に掲載されていた座談会の内容の分析の3つである。この3つの分析資料を選定した理由は、教師、保護者のどちらの意見も記載されていること、20年、30年という期間を経て、宿題に関する概念の普遍的なものと流動的なものを検討できること、の2点である。会話や雑誌への投稿、自由記述を分析するにあたり、定性的コーディングを行い、何度も修正を加えながら各話題のコードを設定していった。

その結果、宿題に含まれる概念として、コードはa~hの8つにまとめられた。【a 学力の定着】【b 家庭学習の定着】【c 内容】【d 必要性】【e 個人差】【f 学校・家庭の関係】【g 負担感】【h その他】である。

第3章 フォーカス・グループ・インタビューの分析

本研究においては、フォーカス・グループインタビュー（以下FGIに省略）の手法を利用する。

FGIは、具体的な状況に即したある特定のトピックについて選ばれた複数の個人によって行われる形式ばらない議論のことであるとBeckら(1986)は定義している。Brodigan(1992)はFGIは探索的な研究をする場合に最も適していると言われており、探索的アプローチは、対象について予備知識が十分でない領域について調べ、「前提となる事項」を知ることが目的としており、探索的に行うFGIは研究を次の段階へ進めるための第1歩となり得るといえる。宿題について学術的に明らかにされていることが少ない本研究において、FGIは有効な手段といえる。Mertonと

Kendall(1946)は4つの使用方法を説明しており、本研究においては、第1の使用法である、反応や効果と人々の背後にある理由を探るために用いる。

教師グループのFGIメンバー収集にあたる留意点は、第1に教師の年代、経験年数が偏らないこと、第2に職務上の関係性がなく自由に発言できること、である。

保護者グループのFGIメンバー収集における留意点は、第1に現在小学生の子どもがいること、第2に互いの関係性がなく自由に発言できること、第3に教職についている者でないこと、である。教師グループのFGIは表2の参加者で、2019年11月23日に貸会議室において約2時間のインタビューを行った。保護者グループのFGIは表3の参加者で、2019年11月17日に貸会議室において約2時間のインタビューを行った。インタビューにあたり、本研究で得られる情報の扱いについて了承してもらった。

表2 教師 FGI 参加者

項目	A 教諭	B 教諭	C 教諭	D 教諭	E 教諭
性別	男性	女性	女性	男性	女性
年代	20代	30代	30代	40代	50代
教職経験年数	2年	10年	12年目	16年	30年
今年度の担当	4年生	特別支援学級	2年生	6年生	4年生
平均出勤時間	6時	8時10分		7時50分	7時50分
平均退勤時間	20時	18時	19時	19時30分	21時
休日出勤	よくある	たまにある	あまりない	たまにある	よくある

表3 保護者 FGI 参加者

項目	Rさん	Mさん	Yさん	Sさん	Uさん
性別	女性	女性	女性	男性	女性
年代	30代	40代	40代	40代	40代
小学生の子ども	1年生	5年生	5年生	5,5年生	3,6年生
小学生以外の子	1歳	14歳	13,17歳	13,15,18歳	なし

分析の手順として、ICレコーダーの音声記録から逐語録を作成し、関連発話を抜粋、その後研究者による言いかえの作業を行った。FGI参加者には自己の「発言」と「研究者による言いかえ」の間で、曲解や勝手な解釈が生じていないか確認をしてもらい了承を得た。

第4章 宿題における教師と保護者の意識に関する考察

○個人の価値観の比較

教師は労働の〔実態〕や、子どもや家庭の

〔実態〕、子どもを取り巻く〔環境〕や、学校や市の施策などの〔環境〕、自身の教師としての〔経験〕や親としての〔経験〕に大きく影響を受けながら、宿題という業務に取り組んでいた。また、一貫した目的意識や自身の取り組みがあるわけではなく、様々な価値観の間で揺れ動きながら宿題に取り組んでいる教師の姿が見えてきた。宿題の目的についても5名に共通する箇所はあるが、主眼を置いている部分は個人により異なっていることもわかった。

保護者は家庭教育に関する個々の価値観を持っており、学校教育と家庭教育のとらえ方には個人差があり、慣習や子への思い、親としての役割期待を感じながら宿題に関わっている側面がある。保護者は家庭教育において、家庭学習のみが大切だとは考えておらず、遊びや睡眠を含めた子どもの健やかな成長を願っていた。

○宿題の目的

【a 学力の定着】【c 内容】【d 必要性】の3つの項目に関して、効果や目的が曖昧になっていることで保護者は疑問を感じている。教師は疑問を持つ時間的ゆとりもないことや学校文化により“当たり前”となり慣習的に行っている部分も少なからずあることがわかる。また、保護者は家庭教育において家庭学習だけではなく、家庭生活の充実も考えていることがわかった。

○学校教育と家庭教育のとらえ方

【b 家庭学習の定着】【e 個人差】【f 学校・家庭の関係】の分析から、教師は子どもや家庭の差がある中で全員の学力向上のために家庭教育や家庭学習に強い関わりを持つようになっているが、家庭はそれぞれの家庭教育を実践していこうとしており、すれ違っている様相が浮かびあがった。1章で述べた山村や倉石の、学校優位のもとでのあいまいな相互依存の関係や、教育の一部を主として家庭という外部に依存（委託）せざるを得なかったという論とは違う、学校一家庭の関係が見られた。

○負担感

【g 負担感】について、教師は自己の負担感

と宿題の目的のバランスをとろうとしている姿が見受けられた。保護者は子どもや自身が負担感を持たない程度の宿題を望み、家庭生活においてゆとりがあることを望んでいる。本研究における予備調査でも教師の宿題に関する業務が1日平均43分費やされていることを考えると、宿題の目的や効果も明確でない現状で、精神的な負担感や時間的な負担感と効果のバランスについて検討を加える必要があると考える。

終章 研究の成果と課題

本研究の成果として、3つの資料を用いて定性的コーディングを行うことで、宿題に内包される8つの概念カテゴリを抽出することができた。また、宿題という教育活動において教師も保護者も個々の価値観を持っており、教師も保護者も確固たる目的やスタンスをもって宿題に取り組んでいるというよりも様々な事柄に影響を受け、揺れ動きながら取り組む姿が明らかにできた。また、宿題の目的の不明瞭性や、教師と保護者の学校教育と家庭教育のとらえ方のすれ違い、負担感から見た課題について指摘することができた。

本研究の課題として、本研究で使用したサンプル数やインタビューの参加者人数のみでは、宿題の一側面を捉えたに過ぎない。宿題に関するさらなる知の積み上げを行うことが必要不可欠である。

【主要参考文献】

- ・ 佐藤秀夫（1987）「『宿題』はなぜ生まれたのだろう」『おそい・はやい・たかい・ひくい』Number 2 ジャパンマニシスト社。
- ・ 丸山啓史（2016）「1960年代におけるランドセル通学廃止の経過－宿題にみられる学校教育の家庭依存に関わって－」『子ども社会研究』22号、155-171頁。
- ・ 倉石一郎（2005）「〈宿題〉から見た解放教育－教育総動員体制論序説」『東京外国語大学論集』第71号、181-196頁。
- ・ 山村賢明（1993）『家庭と学校』放送大学教育振興会。